日刊工業新聞　2022.10.12

グローバル・スコープ

日本の命運左右する首相の去就

数に頼る権力捨て信念通せ

私はこの3カ月、文字通り「死線」をさまよった。ちょうど安倍晋三元首相の暗殺事件が生じた前後から国葬に至る時期だ。10年以上前に予防手術をした腹部大動脈瘤が感染し、炎症係数（CRP）は30を超え、39度の高熱が続いた。私はこれまで何とか開腹手術は回避しステントグラフト内挿や抗生剤治療を行ってきたが、もう選択肢はなくなった。おなかの真ん中を30センチメートルにわたって開腹し、感染した大動脈およびステントグラフトを取り出し、動脈バイパス手術を受けた。手術は20時間に及び、その後10日間にわたってもう死にたいと何度思った事か。

しかし、私は生き返った。単に主治医が全米ナンバーワンの称号と評される「ベストドクターズインニューヨーク」に4年連続選出され、日本の報道番組で何度も「神の手」と紹介された大木隆生・慈恵医大教授であったからだけではない。彼は何よりも何としてでも成功させるという類まれなるコミットメントと、ひたむきさを持っていた。

集中治療室で人工呼吸器に繋がれた。悪夢だった。半ば意識を失いつつ、ありとあらゆる幻想、幻影の世界で、集中治療室を出て下界で見たものは、政治とはいえない政治の世界である。どこに個々の政治家のコミットメントがあるのか。単に自分にとっての有利不利を判断し、自分の信条や職業論理を全く欠いた政治の世界である。旧統一教会の関係でも真っ先に疑念が払われなければいけない権力の最高峰にあった安倍派の領袖（りょうしゅう）は自民党の調査の対象から外されている。国権の最高機関の国会議長がきちんとした説明を回避し続けているのは何故か。今のように圧倒的多数を有する安倍派のバックアップがあれば、議長職を守れると思っているのか。これにより、自身が築き上げた名誉と国会議長の権威が失われていくのに目をつむるということか。この不合理な世界は早晩崩壊する。即刻辞職されるべきだ。

日本の命運を左右するのは岸田文雄総理大臣の去就だ。旧統一教会や国葬問題での判断ミスの原因は岸田氏の真面目さに起因するのかもしれない。リベラルたる宏池会の領袖ながら、安倍元首相に追随し庇護を受けてきた習慣から離れられないがごとく、旧統一教会問題や国葬問題で保守をかばう姿勢を見せ続けている。岸田首相が今日必要とされる「政治家」となる唯一の方法は従来の数に頼る権力手法を捨て、信念を通す事である。旧統一教会問題について誰しも納得する公平かつ政治を排した調査を行い、断固とし措置をとる事である。自民党の多数の反発があれば内閣総辞職や解散総選挙といった首相の専権行使に持ち込むことである。それしか日本を救う道はない。

これは死線から立ち戻った者のたわ言か。

（第2・4水曜日に掲載）

岸田首相は旧統一教会問題や国葬問題で保守をかばう姿勢を見せ続けている

日本総合研究所
国際戦略研究所
理事長
田中 均

無断転載・複写禁止㈱日刊工業新聞社